

Inclusive, Pluralistic, and Exclusive Aspects of Leibniz's Natural Theology

Shohei EDAMURA[†]

Abstract

This paper will examine to what extent the Leibnizian philosophy accepts non-Christian cultures and religions, and explore the relationship between the essence of his theology and our modern society. I first present Leibniz's understanding of natural theology and reason. According to Leibniz, any person in the world has natural reason, and through this, they can realize eternal truths, such as the truth that every human soul is immortal. Second, I discuss how Leibniz evaluated Chinese theology. He argued that the ancient Chinese understood God or the supreme substance by the name of “*Li* (理)” or “*Shangdi* (上帝)”, and without a revelation they knew that God created everything in the universe in accordance with the providence. I argue that although Leibniz's understanding of Chinese theology was not accurate, we can still understand that in a limited sense, Leibniz had a pluralistic view in terms of religion and culture.

Keywords

comparative thought, Leibniz, Chinese philosophy, Buddhism, Shinto

ライプニッツの自然神学がもつ包摂性・多元性⁽¹⁾・排他性

枝村 祥平[†]

キーワード

比較思想, ライプニッツ, 中国哲学, 仏教, 神道

本論は、ライプニッツ哲学がキリスト教以外の宗教をどの程度容認し包摂しているのかを探り、そのエッセンスと現代社会との関連をみる⁽²⁾。議論の順序としてはまず、ライプニッツ（1646-1716）の自然神学概念を探り、ライ

プニッツが古代ギリシア人・中国人にも確固とした自然神学があったと考えたことを確認する。そして、ライプニッツがどのような観点でキリスト教以外の宗教の価値を評価したのかを探る。

[†] edamura@seiryu-u.ac.jp (Kanazawa Seiryu University, Liberal Arts and Sciences)

1. 理性に基づく自然神学

まず、ライプニッツが自然神学をどう捉えたかをみてみよう。『弁神論』（1710）で、ライプニッツは二つの種類の真理があるという。

さて、理性の真理には二つの種類がある。一つは永遠真理と呼ばれているもので、これは絶対的に必然的で、反対が矛盾を含むようなものである。このような真理の必然性は論理的、形而上学的、あるいは幾何学的で、それを否定すると不合理に陥らざるを得ない。真理にはもう一つの種類のものがあり、実定的真理と呼ぶことができる。⁽³⁾ (G.VI.50)

「実定的真理」、つまり神の意志選択に基づく真理については、ほとんどの場合アプリオリに推し量ることはできず経験的観察・記録によって知るほかないのだが⁽⁴⁾、必然的真理はアプリオリに知られうるとライプニッツは考える⁽⁵⁾。そしてライプニッツによれば、魂の不死の教説は自然神学の本質的な部分だが、いかなる単純実体ないしモナドも自然的に破壊されることはなく (M.4)、人間の魂はモナドの一種であり不死である (PNG.4)、ということがアプリオリな形而上学的考察によって知られうると彼は考えた⁽⁶⁾。もちろん神が存在することも自然神学に欠かせない教説で、ライプニッツは我々が「神の現実存在をアプリオリに」知りうると言っている (M.45)⁽⁷⁾。ライプニッツによるスピノザ論駁も、アプリオリな議論となっている。スピノザ (1632-77) は宇宙が神の意志選択の結果ではないと考えたが、理性をよく働かせれば、現実世界以外に無限に多い可能世界があること、神が多くの可能な選択肢から意志を駆使して一つの宇宙を選んだことがわかるはずだ、とライプニッツはいうのである (G.VI.256-257 = T.234)。また、現実存在する有限なものから、その原因としての神を推し量る議論も

(M.32-36, 45)、純粹にアプリオリではないにしても理性に基づいた自然神学をなすものといえる。

さて以上の自然神学観に基づいて、ライプニッツは古代ギリシア人を称揚する。『ウィーン講演』⁽⁸⁾では、啓示を欠いた古代ギリシア人がヘブライ人にもまして「聖なる哲学」としての自然神学の確立に寄与したことが強調される。

・・・神は至高の摂理によって、より未熟であって、教育がより少なく、軽率に教化されている人々を、主としてヘブライ人を道具のように使って、預言者たちの啓示により教育した。しかし後に神は、知恵の熱意をギリシア人の精神に注ぎ込んで、新しい光を人類にともし、神的諸真理が、より正確な認識について進歩へ促す世俗の人間のすべての疑いに対して、確かな証明によって固められるようにしたのである。⁽⁹⁾

モーセが十戒を提示したのは、プラトンはおろかタレスなどが活躍するより昔で、その意味でヘブライ人はギリシア人たちが活躍する前に神の声を聴き啓示を受けたとも言える⁽¹⁰⁾。しかしライプニッツによれば、ヘブライ人の神観は想像力に基づいており不正確である⁽¹¹⁾。これに対しギリシア人は理性に基づいて神の存在や性質を突き止めたので、より高い評価に値するというわけである。

2. 中国文化に対する評価

ライプニッツの中国文化に対する評価も、彼の自然神学理解に基づいたものである。ライプニッツは17世紀の知識人の中で、中国に対して異例ともいえる強い関心を示し、高い評価を与えた。彼は清に赴いたイエズス会宣教師ジョアシャン・ブーヴェ (1656-1730) と何度も書簡をやり取りしたし⁽¹²⁾、明で活躍したマ

テオ・リッチ (1552-1610) の中国に関する見解に同意している (DT.1, 28)⁽¹³⁾。『最新中国情報』(1697/9) で、「中国の版図は実に大きく、東方におけるもっとも聡明なこの国民の評判はきわめて高く、近隣諸国に対する権威は絶大」だとまでライプニッツは書いている⁽¹⁴⁾。また彼は、真理を探究する方法を教える幾何学を積極的に学んだ点などを評価して、康熙帝 (1654-1722) を「比類なく偉大」な君主だとしている⁽¹⁵⁾。また民衆については、「互いに不快感を与えあうことを防ぐような公衆的秩序体系の確立に払った中国人のすばらしい努力は実に世界に冠たるものだといわねばならない」⁽¹⁶⁾とし、高官たちは「会話の場合も相手を傷つけるような言葉は一言たりとも発しようと」しないとしている⁽¹⁷⁾。

とはいえ、ライプニッツは当時の中国人の文化をどの部分も手放しに肯定したわけではない。彼は、当時の中国の知識人階級には「真理から、さらには彼ら自身の古典からも離れてしまった人々」がいることを示唆している (DT.1)⁽¹⁸⁾。彼らは儀礼・祭式など伝統的慣行を続けることには関心はあるが、世界に唯一の原因・主宰者があること、主宰者の摂理が世界においてはたらいていることにはまったく気を向けていないというのである。

一方ライプニッツは、古代中国人は有神論者だったと強調する。中国古典を読み解けば、彼らがヨーロッパでいうところの神を認識し崇拝していたことが読み取れるというのである。そしてライプニッツは、中国人たちは古代からずっと唯物論者だったと言うニコラ・ロンゴバルディ (1565-1655) を批判する。『中国自然神学論』(1716)でライプニッツは、「中国人の言う理 (Li) とは、我々が神の名のもとに崇める至高の実体である」とする (DT.9)。そしてロンゴバルディの、理は西洋哲学でいう第一質料に過ぎないという主張に対して、ライプニッツは理が万物の根源であり、受動的で何も生み出

さない第一質料とは違うと主張する (DT.12)。また、理が意志によって働くわけではないというロンゴバルディの主張に対して、理は「その本性の完全性からして、いくつかの可能性から一番適切なものを選ぶ」のだと言う (DT.17-18)。選択は理由に基づき、神は特に一番完全な選択肢を選びとるようにするという (T.350)、いわゆる予定調和の形而上学に基づいて、ライプニッツは古代中国人も神がこの世界を摂理に従って選びとった考えたと解釈するのである。

ライプニッツはまたルドルフ・アウグスト公宛書簡(1697)で、古代中国人が無から宇宙を創造する神を信じていたことを二進数の知識を使って主張する⁽¹⁹⁾。ライプニッツによれば『易経』の八卦は陰と陽により $2^8 = 256$ 通りの数を表現するものである。これは二進数に通じるが、陽(1)は究極の一なる有、つまり神を表現し、陰(0)は無を表現するという。そして陰陽による多様な数の表現は無からの創造というキリスト教神学の基本的な教説を表現するという。

魂の不死の教説についていえば、ライプニッツは『中国自然神学論』で、古代中国人が魂が死後に賞罰を受けると信じていたとする (DT.65)。この信念はもちろん、魂が死後も存続することを前提としている。ライプニッツによれば古代中国人はまた、祖先の魂が死後も子孫のことをみていると信じており、これもまた魂の存続を前提としているという (DT.66)。さらにライプニッツは、精神の王国は至高の存在つまり神によって秩序づけられており、それゆえに行いに応じた賞罰が必ず下ることを、儒教徒たちも信じていたと書いている (DT.65)。

3. ライプニッツ哲学の包摂性・排他性①

— クックによる五つの対立軸に鑑みて —

以上ライプニッツの古代ギリシアや中国に対する評価をみたが、以下ではより一般的に、ライプニッツがどのような宗教や文化を評価し、

どのようなものを厳しく退けたかを探る。ライプニッツの中国関係のテキストを翻訳したダニエル・クックは、最近エキュメニズムとグローバリゼーションという二概念に関係づけてライプニッツを論じ、ライプニッツ哲学の包摂性と排他性を考えるにあたり有用な概念を提示している⁽²⁰⁾ので、まずは彼の議論を参照する。クックによれば、次の五つの対立軸がライプニッツ哲学の特色を探るにあたり有用である⁽²⁰⁾。

- 1: キリスト教的エキュメニズム カトリック 対 プロテスタント
- 2: アブラハムの協和主義 (irenicism) キリスト教 対 非キリスト教 (ユダヤ教とイスラム教)
- 3: 実定的グローバリゼーション アブラハムの宗教 対 異教徒的信念体系
- 4: 過去の実定的グローバリゼーション (神を) 信じる者 対 古代の未開人
- 5: 同時代の非実定的グローバリゼーション (神を) 信じる者 対 同時代の未開人

クックによれば、ライプニッツは第一の対立軸において、ルター派プロテスタントとして、所属する派の意見を汲んでいる。つまり、カトリック的儀礼は聖書に照らしてキリスト者にとって唯一のものとは必ずしも認められないという見解をもっていたというのである。そしてライプニッツは、カトリックの儀礼を否定はしないが、すべてのキリスト者が定期的に行わなければならないものとは認めていない、というのである。

第二の対立軸に関しては、ライプニッツは多くの場合自然神学を重視し、啓示神学的な論争にそれほど頓着しないが、イスラム教を論じる文脈ではイエスを神の子、救世主と認めないイスラム教を拒否している、ということが紹介される。17世紀ヨーロッパにおいてオスマン帝国は脅威であった。15世紀に東ローマ帝国を

滅ぼしてウィーンに迫り、地中海を支配したトルコ人たちの国は、なるほど1571年のレパントの海戦において地中海の覇権を譲り渡したものの、依然異教徒たちがすむ代表的強国であった。ライプニッツはときに、ヨーロッパ諸国の協同と、オスマン帝国への共闘を示唆した。例えば彼が1671-72年に、ドイツ諸国へと侵攻を計画しているルイ14世に対して、オスマン帝国領のエジプトに代わりに侵攻することを提言しようとしたことはよく知られている。このように、ライプニッツがイスラム教を嫌った理由には政治的なものもあると思われるが、『弁神論』には加えてトルコ人の運命についての考え方に対する揶揄もある (G.VI.30)⁽²¹⁾。

第三の対立軸に関してクックは、ライプニッツが同時代のキリスト教と、古代ギリシア、ローマ、中国の宗教を対比していることに触れる。本論ですでに述べたが、古代ギリシア人・中国人が確固とした自然神学をもっていたということで称賛されている、というのである。クックは触れていないが、同時代の大物マールブランシュ (1638-1715) やアルノー (1612-1694) の姿勢と比較するとライプニッツの開かれた姿勢がより明らかになる。マールブランシュは、中国人とスピノザ主義者とともに流神の輩とみなし、ヨーロッパでスピノザ主義が大変な災いをもたらしているという (Entretien.6)⁽²²⁾。そして皮肉っぽく、スピノザにおける敬虔ならざるところと、中国人哲学者の敬虔ならざるところは見事に対応しているというのである。またアルノーは、ライプニッツに比べ古代ギリシア人に手厳しい評価を下す。彼はイエス・キリストに対する信仰が救済の絶対必要条件だとし、それゆえに古代異教徒はいかに有徳であろうと救われないという。

哲学者たち、そして有徳な異教徒たちは、イエス・キリストへの信仰を欠いたまま神、そして彼の摂理についての知識のみに

よって救われることはない。この反対を支持することは、聖書によって確立されたイエス・キリストへの信仰の必要性を破壊することになってしまうだろう。⁽²³⁾

アルノーによれば、ソクラテスのような有徳な異教徒でさえ決して救済を得ることができない。古代ギリシアの哲学者たちは神と人類との媒介者であるイエスを知らなかったし、徳に対する誇りをもつ点で傲慢で謙譲というキリスト教の重要な精神を欠いているというのである。引用したアルノーの著書には、古代ギリシア人への称揚はみられない。一方ライプニッツは、理性的な神学の教説が世界において万人に理解されることを欲し、教会を全世界に拡張しようとした。そこでは、啓示によって与えられた福音の歴史は重要ではあるが絶対必要ではないかもしれない。

第四の対立軸においては、古代文明の中でも未開なものがあると考えられていることに触れられる。ライプニッツは古代ギリシアや中国を高く評価したが、古代人の文化をのべつまくなしにほめたたえたわけではないのである。むしろ彼は、古代の文化を一種のヒエラルキーへと組み込む。そこでは、「迷信的・神話的・偶像崇拜的な」⁽²⁴⁾ものは、未開で乗り越えられるべきものとみなされるのである。

第五の対立軸においては、ライプニッツがアメリカ大陸の人々の習俗に敬意をもたなかったことに触れられている (T.257)。彼らは身体的な強さは勇敢さを持つてはいるが、それ以外に評価すべき点はないというのである。ライプニッツは一貫して迷信的背景をもった儀礼を不必要なもの、人間社会に不利益をもたらすものと考えており、ネイティブ・アメリカンのトーテミズムもそうしたものとみなされることになるのだろう。この点においてライプニッツは、彼以降に展開した神秘主義的色彩をもったドイツ哲学の源流というよりも、フランスで花開い

た啓蒙主義的哲学の大物ともいえる相貌を見せる。

4. ライプニッツ哲学の包摂性・排他性② —ライプニッツは日本をどう評価するだろうか—

ライプニッツはいかなる形の宗教をも受け入れる、強い意味での宗教多元論者だったわけではない。彼の議論と日本における宗教の特質を照らし合わせると、ある種の排他性がより一層明らかになってくる。ライプニッツは日本についての知識をほとんど持たなかったが、ライプニッツの自然神学は一神教的であり、多神教的ではなく、八百万の神を拝む姿勢とは親和的ではないのである。なるほど彼は、ただ一人の至高神が存在し、他の「神々」は至高神の創造物だとする思想を容認するので、ある形の多神教を認めているともみえるが、基本的に彼の思想は多神教とは相容れない。ライプニッツは『ウィーン講演』で次のように言っている。

プラトンは、至高の神が他の下位の神々を生み出し、不死性を与えたと信じたが、その至高の神より下位の神々とは私たちが天使とよぶものにほかならないのである。⁽²⁵⁾

ここでライプニッツは、『ティマイオス』における議論をユダヤ=キリスト教の世界観に合うものとして解釈している⁽²⁶⁾。つまり、下位の神々とは天使であり厳密には神ではない、プラトンは実際はただ一人の神を信じたというのである⁽²⁷⁾。すると、ライプニッツは例えば神道についてなにがしかの知識があれば否定的な見解を示していたと思われる。神道では神々の上下関係は示唆されているかもしれないが、17世紀においてただ一人の根源神からすべてが生まれたという教義はなかったようである⁽²⁸⁾。

さらに、ライプニッツは迷信に対しては一貫して批判的である。そして祖先や偉人の霊が自

然法則を逸脱した奇跡をおこすという思想を迷信と考える。彼は先祖や偉人を祀る中国人の風習を認めるが、それはこの風習が敬意のみに基づいたもので霊が奇跡を起こすことを期待したものではないという彼独自の解釈に基づいたものである (G.II.381-382 1709年デ・ボス宛書簡)。ライプニッツの理解によれば、中国人は祖先たちが直接奇跡を起こして子孫たちに幸福な生をもたらすと信じていたわけではない。中国人はなんらかの幸運を期待してはいるが、それは至高の存在、神が統括する秩序のもとにあって奇跡ではないと考えられているというのである。だから例えば、菅原道真が強い恨みを残してこの世を去り、死後は天候を左右する雷神となったという考えは⁽²⁹⁾、ライプニッツにとっては受け入れられないものだったと考えられる。そしてそうした思想に基づいて天満宮で天災を除くために祈る風習にも否定的だったであろうと思われる。

最後に、ライプニッツが（不完全な知識に基づいてであるが）仏教に否定的な見解を示していたことに触れる。『弁神論』でライプニッツは、仏教は個別的な魂が死後に消滅するとするアヴェロエスの哲学と共通点があると示唆している。

例えば、中国の一大宗派の創始者であるフォー（仏）の静寂主義者について言われていることがそうである。フォーは四十年の間彼の宗教を説いた後、死期が近づいたとわかると、自分は弟子たちに隠喩のヴェールの下に真理を隠してきたが、あらゆるものは、すべてのものの第一原理として彼が語ってきた無へと還元されるのだ、と弟子たちに向かって宣言した。これはアヴェロエス派の見解より一層悪いように思われる。どちらの説も支持できないし荒唐無稽ですらあるが、近頃の人々は、他を飲み込む普遍的で唯一の靈魂の考えを

受け入れるのにためらうことはなかった。
(G.VI.55-56)⁽³⁰⁾

ここでライプニッツは仏教によれば人間の魂は不死ではないということを示唆しているが、多くの仏教徒は輪廻転生を信じていたので、この批判は的外れに思えるかもしれない⁽³¹⁾。それでも、ライプニッツは輪廻転生にも批判的な見解を示している。そのことはピュタゴラス主義者たちへのコメントから読み取れる。

・・・ピュタゴラスは、東方からもたらされた魂の不死〔の教説〕を大いに煽った。そして彼はギリシアとイタリアの人々に広めたが、輪廻転生というお伽噺を入れてしまった。というのも、作り話の覆いを求めて生々しい真理にはそれほどうごかされないのは、民衆の基本的なならわしだからだ。⁽³²⁾

ここでライプニッツは輪廻転生は、おそらくインドを念頭においているのだろうか、東方からきた偽りの教説だと示唆している。ライプニッツによれば、死後も人間の魂は存続するが、眼にみえないような小さな有機的身体を伴いつづけており、突然他の種の生物に姿を変えることはありえないのである (PNG.6)。

5. 総括

総括として、ライプニッツの見解の特徴を振り返ってみたい。ライプニッツ哲学は東アジアにおけるいくつかの宗教を拒絶しているようにみえる。キリスト教のみを真の宗教とするマールブランシュとアルノーはこの点についてはライプニッツを評価するだろうが、ライプニッツ哲学は、神道と仏教という、長らく日本に根付いてきた宗教に対してどうも否定的である⁽³³⁾。

もちろん中国の自然神学を積極的に認めた点にライプニッツ哲学の包摂性はみられるが、ラ

イプニッツは自分の予定調和の枠組みに基づいて、いささか強引に古代中国の思想を解釈しようとしている。ライプニッツによれば「理」も「上帝」もともに、神を指し示す語である。しかし陳榮灼によると、朱子は「理」は道德などに関する不変の基準とみなしたが、人間や生物や自然物を産出し、その運動の原因となるものとは考えなかった⁽³⁴⁾。「上帝」は最高神を指す言葉でライプニッツのいう神と通じるところがあるかもしれないが⁽³⁵⁾、「理」と「上帝」が同じ存在を指すという解釈はやはり強引に思われる。ライプニッツはいささか自信をもって、中国では文献批判などが進んでいないし、自分たち西洋人が古代中国の教説を（同時代の中国人より）よく解釈できるはずだとしているが（G.II.382）、いわゆるオリエンタリズムのきらいもある。

では、現代社会を振り返って、ライプニッツ哲学をどう評価できるだろうか。20世紀以降使用された言葉を使ってライプニッツの立場を評するならば、多元主義（pluralism）というより包括主義（inclusivism）ということになるだろう。多元主義は、メジャーな宗教のうちどれもが本来的なものであるかを決定しない立場である。一方包括主義は、ある宗教を本来的なものとし、他の宗教を信仰する人に対して、本来的な宗教の枠組みの中で救済が与えられる可能性を否定しない立場である。典型的にはキリスト教を本来的な宗教とし、ただ主、イエスによる救済はカトリック、ギリシア正教、プロテスタント諸派などの教会に所属しない人々にも及ぶとする立場がそれにあたる。ライプニッツの自然神学は、キリスト教とユダヤ教の優劣を明ら

かにするものではないが、ユダヤ＝キリスト教的伝統の影響を受けた創造神論に基づいて、異なる宗教文化のうち優れたものを肯定してゆくという立場と言えるだろう。

そうした立場は、今日多くの国が受け入れている信教の自由に直結するわけではないが、それと親和性をもつ。理性に由来しない宗教の教義は人類普遍のものとして押し付けず、信じるか否かを個人の自由に任せる、というのは概ね先進国の枠組みとなっている。そしてさかのほれば、理性に基づいて道德を認識し、全人類が所属する「王国」に思いをはせ、神の理念をもとうとしたカントもまた、ライプニッツの思想を受け継いだといえるのではないか⁽³⁶⁾。確かに政治的枠組み自体は、ライプニッツやカントの直接的影響によるものというよりはむしろ、ロック（1632-1704）らの寛容の思想に影響されたジェファーソン（1743-1826）などがもたらしたものとも言えるかもしれない。それでも、その枠組みの全部ではないにせよ重要な部分に強固な理論的根拠を与えたのは、むしろドイツの哲学者たちの方のように思えるのである。

最後になるが、ライプニッツの神学の意義が語りつくされたわけではもちろんない。ライプニッツの神学や人間把握・存在把握には、単にキリスト教と古代・近代哲学の綜合だとかたづけられない独創性がある。存在根拠としての神が、刻々とモノドと協働するという思想はハイデッガーをも惹き付け、ライプニッツは彼の共思索者と評されたわけであるが、そうした観点をも含めたライプニッツ神学の現代的意義はまた機会を改めて論じなければならない。

注

- (1) 20世紀においてジョン・ヒックは宗教多元論（pluralism of religion）という語を用い、包摂的・多元的な姿勢を強調したが、ライプニッツがヒックと同様の多元論を奉じていたとはもちろん到底言えない。ヒックはキリスト教、イスラム教、仏教、ヒンドゥー教などメジャーな宗教がそれぞれ絶対的実在の異なった不完全な表現であり、イエスの受肉の教義が「文字通り真」ではなく「適切な態度を喚起する力によって」真だというのが、ライプニッツはこのような主張はしていない。John Hick, *God and the*

Universe of Faiths: Essays in the Philosophy of Religion (London: Macmillan, 1973), 175参照。とはいえ、古代ギリシア人・中国人の自然神学を積極的に認める姿勢はある程度まで多元的と評してよい。

- (2) 本論は、2016年4月1日に大阪大学にて行われた日本ライプニッツ協会大会でのシンポジウム読み原稿に加筆し、推敲を加えたものである。
- (3) ライプニッツ著作集VI.45 (佐々木能章訳) を参考にし訳した。
- (4) 一方でライプニッツは実定的真理でも、自然法則についてはアプリオリな推察が可能であるとしている。例えばスネルの法則は、空気とガラスを通過する光がどのような経路をたどるかについてのもので、他の可能世界では別の光学の法則が成り立っていることからすれば必然的な法則ではないが、観察をまたずともアプリオリな推察が可能なることをライプニッツは示唆している (G.VI.50; DM.22)。そこには、神が選んだ現実世界ではシンプルな自然法則が成り立っているはずであり、光は媒質の密度を加味した場合にもっとも効率的な経路となるものを選ぶだろう、という理解が前提としてある。
- (5) クリプキは「明けの明星は宵の明星である」ことはアプリオリに知ることとはできず観察によらなければ真だとわからないものの、それでも必然的な真理であると考えたが、私がみた限りライプニッツにはこのようなアポステリオリな必然性についての洞察はない。Saul Kripke, *Name and Necessity* (Cambridge, MA: Harvard University Press, 1980) 参照。
- (6) なお後にカントは『純粋理性批判』で魂の不死を論証しようとする合理的靈魂論を批判するが、ライプニッツ哲学も批判対象として念頭に置かれていると思われる。B.413-28のモーゼス・メンデルスゾーン論駁など参照。
- (7) ライプニッツは神の存在論的証明を認める。最完全者という概念は何ら矛盾を含まず (DM.1)、また最完全者を制限し否定するものはなくその可能性を妨げるものはないので (M.44, 45)、最完全者たる神の概念から神が現実存在することが推し量ることができる、というのである。一方カントは『純粋理性批判』で、ライプニッツは最高の存在者が可能であることをアプリオリに示そうとしたものの、成就是していないと述べている (B.630)。
- (8) ウィーンでのライプニッツによる講演の手稿で、日付は1714年7月1日となっている。Müller and Krönert, *Leben und Werk von Gottfried Wilhelm Leibniz: Eine Chronik* (Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1969) に未出版テキストとして本稿の名前が掲載されていたが、パトリック・ライリーはハノーファー州立図書館のライプニッツ文書館で手稿全文を発見し出版した。Riley, "Leibniz, Platonism, and Judaism: the 1714 Vienna Lecture on 'the Greeks as Founders of a Sacred Philosophy,'" in *Leibniz und das Judentum. Studia Leibnitiana Sonderhefte* 34, eds. Daniel J. Cook, Hartmut Rudolph, and Christoph Schulte (Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2008), 95-113. 参照。アカデミー版ライプニッツ著作集第一系列の1714年のテキストを集めた巻に『聖なる哲学の創始者としてのギリシア人について』(Über die Griechen als Begründer einer Philosophia sacra) の表題で掲載される予定であり、工作舎『ライプニッツ著作集 第II期第二巻』に拙訳が掲載されている。
- (9) Riley *ibid.*, 113.
- (10) モーセは紀元前16-13世紀に活躍したと推察されているが、これはもちろんタレス (c.624-546) やプラトン (c.428?-348?) よりはるかに前である。
- (11) ライプニッツはヘブライ人の神観のどの点が不正確であるかについて『ウィーン講演』では詳細に述べてはいないが、例えば神に形をもった顔があるかのような語りは誤解を与える可能性があると考えられているかもしれない (出エジプト記33:19-20)。ライプニッツによれば神は何らの身体ももたないが、アリストテレスも第一動者に部分や大きさはないと論じている (『自然学』第八巻)。
- (12) Olivier Roy, *Leibniz et la Chine* (Paris: Vrin, 1972), 154-62及び Maria R. Antognazza, *Leibniz* (New York, NY: Cambridge University Press, 2009), 433-6参照。ライプニッツとプーヴェは『易経』や2進数について熱心に語り合った。
- (13) リッチは、古代中国人が宇宙を創造した唯一の神を信じていたとし、また中国人の先祖を祀る風習を霊により奇跡を期待した迷信的ではないものと解釈したが、ライプニッツはリッチの見解に同意している。Meng Chen "Gottesvorstellungen der Chinesen bei Matteo Ricci, Christian Wolff und G.W. Leibniz," in *IX Internationaler Leibniz-Kongress: Natur und Subjekt Teil I* (2011), 168-77. 参照。
- (14) ライプニッツ著作集X.109 (山下正男訳)
- (15) ライプニッツ著作集X.98 (山下訳)
- (16) ライプニッツ著作集X.95 (山下訳)
- (17) ライプニッツ著作集X.96ライプニッツは、中国人は実践哲学の順守に関してヨーロッパ人に遥かにまさるとまでいうが、このようなライプニッツの見解の背後には三十年戦争(1618-48)の苦い記憶があるのかもしれない。
- (18) ライプニッツ著作集X.16頁。以下『中国自然神学論』からの引用は山下正男訳を参考に訳したものである。

- (19) Julia Ching, and Willard G. Oxtoby, eds. *Moral Enlightenment: Leibniz and Wolff on China* (Sankt Augustin: Institut Monumenta Serica, 1992), 72参照。
- (20) Daniel. J. Cook, "Leibniz: From Ecumenism to Globalization," in *X. Internationaler Leibniz-Kongress: Für unser Glück oder das Glück anderer Teil I* (2016), 541. 参照。
- (21) ライプニッツは『弁神論』序文で、トルコ人は運命を受け入れようとするあまりペストに汚染された土地から去ろうともしないということで非難されている、という。そうした運命観はライプニッツによれば「マホメットの運命」とも呼べるものである。
- (22) マールブランシュは、中国人のいう「天主」はせいぜい巨人たちを打倒したゼウスに似た強力な存在を指し示すのみで、絶対的で必然的な存在者を指し示すわけではないという。
- (23) Arnauld.X.65. (*De la Nécessité de la foi en Jésus-Christ pour être sauvé*, Première Partie Chapitre 1)
- (24) Riley, *ibid.*, 113.
- (25) Riley, *ibid.*, 110.
- (26) 『ティマイオス』では、宇宙全体、魂、天体、大地などがかたちづくられる様子と、「その他の神霊」、「神々の子ら」がどううまれたかが論じられる(40d-41d)。彼らは不死で、万有を生んだ神から人間を製作するよう命じられたという。
- (27) プラトンの第13書簡に次のような一文があり、実際に彼がただ一人の神を信じていたことが示唆されている。「要するに、まじめな手紙の書き出しには、「神」という言葉が、それほどでない手紙には、「神々」という言葉が、まずあるわけです」(プラトン全集 XIV.200, 長坂公一訳)。
- (28) なお後に平田篤胤(1776-1843)は天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)が根源神であることを示唆したとされるが、『霊の御柱』をみると、天之御中主神とともに高皇産霊神(たかみむすびのかみ)と神皇産霊神(かむみむすびのかみ)が「天も地もあること」がなく、ただ大虚空があるときに、ただ三柱の独神としておられた、と記されているのみである。平田篤胤『霊の御柱』(東京: 岩波書店, 1998), 20-21参照。
- (29) 東京国立博物館所蔵の重要文化財「北野天神縁起絵巻」(鎌倉時代)など参照。
- (30) ライプニッツ著作集 VI.55-6 (佐々木訳)を参照した。佐々木氏も注で述べられているとおり不正確な記述ではあるが、「隠喩のヴェールの下に真理を隠してきた」という表現は方便の教えを説いてきた釈迦が最晩年に初めて『法華経』にある究極の教えを明らかにしたという天台大師智顗の解釈を彷彿とさせるし、また「あらゆるものは、すべてのものの第一原理として彼が語ってきた無へと還元される」という箇所は、無と空の区別こそないものの龍樹の空の教えを連想させるもので、興味深い。
- (31) なお『中国自然神学論』では、最近の儒教徒と仏教徒が対比され、儒教徒とは異なり仏教徒が天国(極楽)や地獄をはっきりと認めていることが示唆されている(DT.65)。ただ儒教徒も天国や地獄といった言葉を使いたがらないだけで魂の不死を認めてはいるとされている。
- (32) Riley, *ibid.*, 111.
- (33) とはいえ華嚴宗の、個々のものごとが互いに密接に関わり合う(相即相入)という教義と、どのモノドも宇宙全体の生きた鏡となっているという主張との親近性は村上俊江以来つとに指摘されており、華嚴宗の教義とライプニッツ哲学の共通点と相違点をつぶさに研究することは重要な課題と言えるだろう。酒井潔『『華嚴経』と『モノドロギー』: 村上俊江におけるライプニッツ受容』『東洋文化研究』no.16 (2014): 326-56. 参照。
- (34) Wing-Cheuk Chan, "Two or Four Worlds? From Zhu Xi to Leibniz," in *IX. Internationaler Leibniz-Kongress: Teil I* (2011), 163 及び Wing-Tsit Chan, ed. *A Source Book in Chinese Philosophy* (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1963), 636. 参照。
- (35) ただフランクリン・パーキンスは、最初期の古典では「上帝」は世界に内在する神として扱われ、無から宇宙全体を創造したとはみなされていないとしている。Franklin Perkins, *Leibniz and China* (New York, NY: Cambridge University Press, 2007), 17及びChan, *A Source Book*, 4 参照。
- (36) 『単なる理性の限界内における宗教』でカントは、「純粋な宗教の信仰」(Ak.VI.116)が複数の歴史的宗教に見出されることを示唆している。

略号

A/ B = Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*.

Ak = *Kant's gesammelte Schriften*. Königlich preußischen Akademie der Wissenschaften. Cited by volume and page.

Arnauld = *Oeuvres de messire Antoine Arnauld*. Cited by volume and page.

DM = *Discours de métaphysique*. Cited by section.

DT = *Discours sur la theologie naturelle des Chinois*. Cited by section.

Entretien = Nicholas Malebranche, *Avis touchant l'entretien d'un philosophe chrétien avec un philosophe Chinois*.
G = *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*. Ed. C. I. Gerhardt. Berlin: Weidmann, 1875-1890. Reprint, Hildesheim: Georg Olms, 1978. Cited by volume and page.
M = *Monadology*. Cited by section.
PNG = *Principes de la nature et de la grâce fondée en raison*. Cited by section.
プラトン全集 = 『プラトン全集』1974-76岩波書店
ライプニッツ著作集 = 『ライプニッツ著作集』1988- 工作舎
T = *Théodicée*. Cited by section.

文献

- Antognazza, Maria Rosa. *Leibniz: An Intellectual Biography*. New York, NY: Cambridge University Press, 2009.
- Chan, Wing-Cheuk. "Two or Four Worlds? From Zhu Xi to Leibniz." In *IX. Internationaler Leibniz-Kongress: Natur und Subjekt Teil I* (2011): 162-167.
- Chan, Wing-Tsit, ed. *A Source Book in Chinese Philosophy*. Princeton, NJ: Princeton University Press, 1963.
- Chen, Meng. "Gottesvorstellungen der Chinesen bei Matteo Ricci, Christian Wolff und G.W. Leibniz." In *IX. Internationaler Leibniz-Kongress: Natur und Subjekt Teil I* (2011): 168-77.
- Ching, Julia, and Willard G. Oxtoby, eds. *Moral Enlightenment: Leibniz and Wolff on China*. Sankt Augustin: Institut Monumenta Serica, 1992.
- Cook, Daniel. J. "Leibniz: From Ecumenism to Globalization." In *X. Internationaler Leibniz-Kongress: Für unser Glück oder das Glück anderer Teil I* (2016): 541-55.
- Hick, John. *God and the Universe of Faiths: Essays in the Philosophy of Religion*. London: Macmillan, 1973.
- 平田篤胤『霊の御柱』東京：岩波書店, 1998.
- Kripke, Saul. *Name and Necessity*. Cambridge, MA: Harvard University Press, 1980.
- Müller, Kurt, and Gisela Krönert, eds. *Leben und Werk von Gottfried Wilhelm Leibniz: Eine Chronik*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, 1969.
- Perkins, Franklin. *Leibniz and China*. New York, NY: Cambridge University Press, 2009.
- Riley, Patrick. "Leibniz, Platonism, and Judaism: the 1714 Vienna Lecture on 'the Greeks as Founders of a Sacred Philosophy.'" In *Leibniz und das Judentum. Studia Leibnitiana Sonderhefte 34*, edited by Daniel J. Cook, Hartmut Rudolph, and Christoph Schulte, 95-113. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 2008.
- Roy, Olivier. *Leibniz et la Chine*. Paris: Vrin, 1972.
- 酒井潔『『華嚴経』と『モナドロジー』：村上俊江におけるライプニッツ受容』『東洋文化研究』no.16 (2014): 326-56.